

研究マインド持つ薬剤師へ

武蔵野大学薬学部長 市瀬 浩志氏

薬大トップに聞く



武蔵野大学薬学部は、来年度からスタートする改訂薬学教育モデル・コア・カリキュラムに対応し、低学年次に基礎的な学科科目を学び、4年次には学生の興味関心や目指す進路などに応じて発展科目を自由に組み合わせる選択できるようなカリキュラムを工夫した。2003年に開設した「薬学研究」を活用し、研究マインドを持つ薬剤師の育成にも取り組むと共に、他学部との専門職連携教育や他大学医学部と連携した講義を展開する。今年4月に就任した市瀬浩志薬学部長は、「薬学を学ぶ中で理系ならではのワクワク感を味わってほしい」と薬学の魅力をアピールした上で、「臨床現場だけでなく、幅広い健康や医療へのアプローチができる人材を育てたい」と述べ、多様な人材の育成に意欲を示す。

薬学研究所を活用

最新の研究を授業に還元

武蔵野大は1924年に「武蔵野女子学院」として創設、来年で100周年を迎える伝統校だ。来年度開設するウェルビーイング学部を合わせて13学部で構成されている。

薬学部は、大学の長い伝統の中の革新という位置づけで、大学が男女共学化した2004年に4番目の学部として設置。薬学部を開設する以前か

ら存在した3学部はいずれも文系学部であったが、学院創設者高楠順次郎博士の「理学部設置構想」の悲願もあり、初代薬学部長の齋藤洋氏のもとで設置に至った。

市瀬氏は、自身も薬学部設置当初から教育と研究に携わってきた経験から、「薬学部は『宝箱』と考えている。薬学は、医療系という括りである以前に理系である。化学、物理、生物などの基礎的なサイエンスを学ぶ

学問と医薬品や化粧品、生命に関わる実学的な学問が融合した分野であるので、本学の学生には理系ならではの、お宝のようなワクワク感を味わってもらおう時間を持ってほしい」と話す。宝箱とい

う表現の中には、薬学部は一つの建物だけで6年間の授業や研究活動がほぼ完結するという意味も込められている。

同大薬学部の大きな特徴の一つに03年に開設された「薬学研究」の存在がある。教員自らが研究者として、新たな「知」を生産し心技を磨くことの重要性を学校関係者に理解してもらい、薬学部

の表現の中には、薬学部は一つの建物だけで6年間の授業や研究活動がほぼ完結するという意味も込められている。

地域医療学など新たな科目も

新コアカリ移行に伴い、地域医療や多職種連携に関連する科目も新たに設ける。4年次の「地域医療学」では、西東京市の薬剤師会に所属する薬局勤務の薬剤師をはじめ、医師、看護師、ケア

に先立って開設された。現在も薬学部と同じ建物内にあり、最新の研究成果を薬学部の授業にフィードバックすることで、質の高い教育を継続的に実現している。

毎年2月には、研究室に配属前の3年生を招き、研究所の研究活動を総括する発表会が行われる。研究員の中には研究室の教員を兼ねている人も多くいるため、学生たちは教員の研究者としての側面に触れて研究室選定の参考にすることもあるようだ。

研究所の前所長である市瀬氏は、「本来、研究と教育を両立しないと大学は成り立たない。随所に研究志向を入れながら、薬剤師としての使命感や倫理観を深めてもらいたい」と強調する。

また、臨床現場の薬剤師にとごまらないキャリアを描けるよう、カリキュラムにも工夫が見られる。

来年度からの新しいコアカリの適用に伴い、学生の学ぶべき内容は増える方向にあるが、卒業のために必要な総単位数はほぼ変えていない。「学生の個性とニーズに合わせた教育」という方針のもと、4年次の共用試験や国家試験合格に向け必要な核となる学科科目は残しながら、自由度を高めることを意識してカリキュラムを組んだ。

具体的には、学生個人の興味と資質を伸ばせるよう、低学年で学ぶ「化学系薬学」「生物系薬学」「物理系薬学」「医薬系薬学」「臨床系薬学」の発展科目を、ある程度自分が選択するべき学問領域の興味関心が固まってきた4年生から選択必修科目として設置。選択科目であるため、学ぶ意欲のある学生は、臨床現場や企業など各学生が目指している進路や勉強の進捗に応じて科目を自由に組み合わせることができる。

地域医療学など新たな科目も

マネージャー、自治体関係者などを講師に招き、それぞれの職種での経験を踏まえた事例の共有や、課題を提示して質疑応答やディスカッションの時間を設ける。

多職種連携に関しては、3年次には同大の看護学部や人間科学部社会福祉学科との「むさしのIPE(専門職連携教育)」を実施し、お互いの職種に対する理解を深める。ディスカッション

と実習」を導入している。出身地はちろん、地域の中核病院での実習を希望する学生がいれば配慮して配属先を決めるという。山梨大学や信州大学の附属病院などに実習に向かう一部の学生に対して、実習期間中の宿泊費を支給する制度もあり、学ぶ意欲のある学生に対する支援が手厚いのも魅力だ。

一方、共用試験や国家試験合格に向けても、低学年次から個人の学習の定着度や進捗に応じた万全なサポート体制を敷いている。1年生の前期は化学、物理、生物等の基礎科目が多く、そこでつまづくその後の学習に進んだ時の理解が難しくなり、復帰が難しくなる。そのため、基礎科目に不安のある1年生は後期が始まる前に2〜4年生がチューターを務める「学修支援プログラム」を受講することができ、苦手科目ごとに少人数のグループを作って1週間、朝から夕方までじっくりと勉強する。

今後は、疫学や医療ビッグデータの分析法や適切な取り扱い方など情報科学技術を習得した学生の育成にも力を入れていく方針。

市瀬氏は「様々なデータを学際的なサイエンスマインドを持って扱える薬剤師が出てくれば、就職先の幅も広がる。薬学部で完結せず、いろいろな思考に触れることができるのが総合大学の良さ」と強調する。

関連記事4〜5面